ART アート

07. 9. 17 宮日

8月の県内美術

透明感と造形を一致 大胆さ保ち強く豊か

向井幸晴水彩画展

新納和子染色展

昼下がりの展示室から、子どもの楽しげな声が漏れてくる。県立美術館(宮崎市)恒例の「たんけんミュージアム」だ。今年の旅は、造形の原理〇△□から入ってシュルレアリスムに至る趣向である。

連動する企画展の「シュルレアリスム展」について、再度触れてみたい。

複数館の協力のおかげで、パズルの断片がうまく嵌(はま)ったように、作品相互の関連が浮かび上がる。ピカビアの「イオ」と「アンピトリテ」や、キリコの「イタリア広場」シリーズなどがその好例だ。

また、資料的な展示物が充実している。

民族的な彫像とシュルレアリストの作品を比較すれば、近代的理性の及ばない、無垢(むく)なイメージを追い求めた彼らの発想が想像できる。

さらに、国際展の写真を見れば、早くも今でいうインスタレーション、つまり仮設的な空間の構成が試みられていたことが分かり、オッペンハイムのテーブルのようなオブジェの意味も明らかになる。

日本において、シュルレアリスムの秀作を所蔵する美術館は多い。すぐに思いつくのは、福岡市立美術館のダリやミロだが、同展の第二弾も考えられるのでは、と将来に夢をつなげておこう。

さて、個展・グループ展を振り返る。

県立美術館県民ギャラリーでの「向井幸晴水彩画展」には、水彩による具象的表現の試みといった挑戦もみられるが、全体としては、おとなしく停滞気味だった。

公募団体の支部展一般に言えることだけれど、もっと生意気な若手が出てくると良い。それには安定した立場のベテランが、今あえて絵画というメディアに懸ける意味を、作品を通して開示し続ける必要があるだろう。

一方、四十年に及ぶキャリアながら、デザイン感覚が若々しいのは、宮日会館パピルスギャラリー(同市)での「新納和子染色展」である。大作の構成と色遣いには、良い意味のアマチュア的な大胆さが保たれて強く豊かだ。

その他、空港ギャラリー(同市)での「久保輝秋空港展」の洗練度は高い。半面、変形画面の扱いにしても、絵画的造形というより、工芸的な傾向を強めている。

最後に、都城市立美術館(都城市)での、問題提起的な展覧会を取り上げておきたい。「都城市民会館厄払いDOKOMOMO選記念展」である。

都城市民会館の建築的価値が公認された記念展だけに、提示された資料と展示構成には説得力があった。近代建築では、県内どころか世界最高レベルの建造物が破壊されたときの、文化的損失は本当に計りしれない。

(宮大教育文化学部准教授・石川千佳子)

水彩画展」には、水彩の透明感と造形を一致させた大作が並ぶ。代表作のエントランスホールシリーズは、ガラス面と光によってもたらされた視覚世界を、キュビスム的な構成でさわやかに描出していく。

同時期に隣の展示室で開かれていたのは、「第十四回宮崎独立美術M展」だ。上埜芳信